朝日新聞
2016年7月5日　掲載

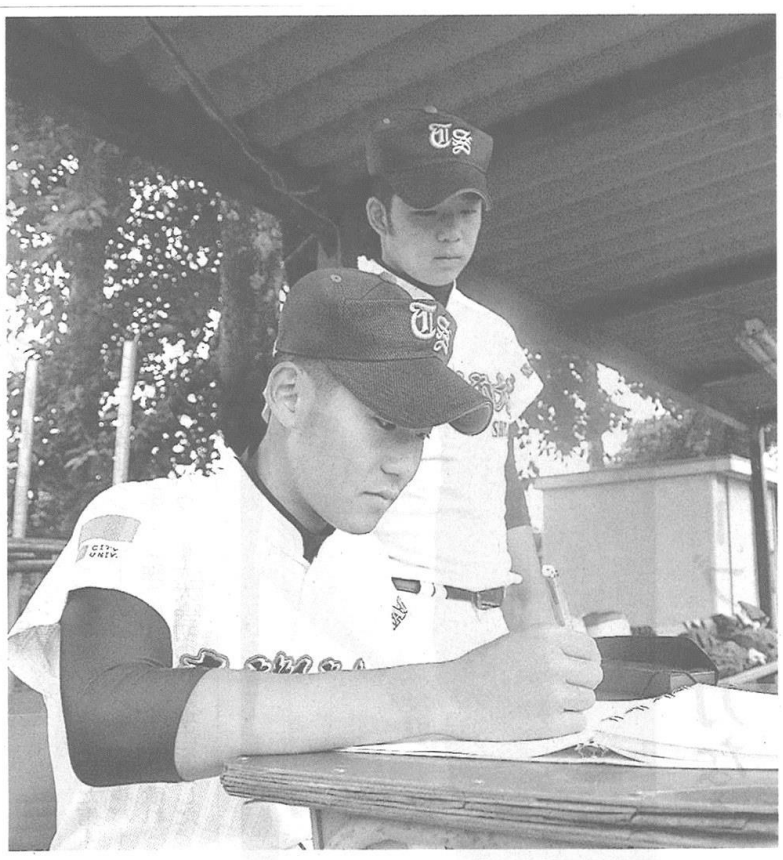
マネジャー　僕が進む道

東京都市大塩尻　中谷将太郎君（3年）

「もっと前に出ろ！」。東京都市大塩尻高校のグラウンド。中谷（なかや）将太郎（3年）は内野陣に声をかけながら守備練習のノックを打っていた。中谷は3年生で唯一の男子マネジャー。平日朝は午前7時から、夜は午後9時ごろまでノックやトスなど守備の練習を手伝う。選手のミスを的確に指摘し脇目も振らずノックを打つ中谷は、真剣な目をしていた。

□■□

中学3年生の冬。中谷は6年間続けてきた野球を一度やめている。このころ、勉強も



スコアを書く中谷（左）と原

視力の問題を克服 この仕事を続けたい

野球と出会って 1

手につかなくなり学校に遅刻するようになった。家から近いという理由で高校を選んだ。

母の寿恵（ひさえ）(48)はそんな中谷に声をかけることさえできなかった。「『なぜこんな体に産んだのか』と言われることが怖かったのかもしれません」

生まれつき眼球の組織が欠けており、右目がほとんど見えない。左目の視力も0・1程度。「最初に野球をやりたいと言い出したときは、正直不安でした」と母は振り返る。

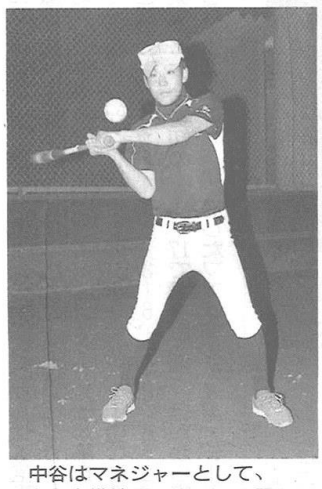
□■□

野球を始めたのは小学校4年生のときだ。中学生になると硬式野球を始め、セカンドを守った。幼い頃から視界の右側は「見えなくて当たり前」だったため、プレーで不便に思ったことはなかった。

中学3年生の夏。定期的に通っていた塩尻市の眼科医から「このまま放置すれば失明の可能性もある」と手術を勧められた。手術は成功したが、同年12月、今度は網膜剝離（はくり）を起こし再入院した。医師から「野球を続けることは難しい」と伝えられた。部活をやめ、失意のまま高校に入学した。

中谷が主将の原航大（3年）と初めて話したのは、高校に入学して1週間がたったころだ。偶然同じクラスになった原は、地元シニアチームで主将を務めた選手だった。中谷が目の病気でプレーできないことを知った原は「マネジャーをやってくれよ。俺は主将としてチームを引っ張る。甲子園に連れてってやるから」と声をかけた。

「うれしかった。そんなことを言われたら断るわけにはいかないじゃないですか」。中谷は入部を決めた理由をそう振り返る。母も「原君に出会って本当に良かった。親子の会話も減る中で、私たちが言わなきゃいけないことを原君が言ってくれたんだと思います」と話す。



中谷はマネジャーとして、主に守備練習でチームに貢献。全体練習後の自主練習にも最後まで参加する

□■□

今ではチームに欠かせない存在になった中谷。2011年の夏、チームを甲子園に導いた新井孝行監督(65)は「守備ができるチームが全国に行く。そのために中谷は貴重な戦力」と評価する。

守備練習から選手の体のケアまでマネジャーの仕事は多い。「最初は、どんな形でも野球に関わりたいとマネジャーになりましたが、今ではむしろこの仕事をずっと続けていきたい」。スポーツインストラクターやコーチなど、マネジャーの経験をいかした職業に就くことが将来の夢だ。

「なんで自分だけ目が見えないんだ、と思うこともありました。でも今は将来の目標もでき、母や原にも感謝しています。ぼくは今、幸せです」

＝敬称略

◇

第98回全国高校野球選手権長野大会が9日、開幕する。ときに壁にぶつかりつつも、ひたむきに白球を追う球児たち。困難に負けず、それを乗り越え野球に携わる人や選手たちの姿を5回にわたって紹介する。

（鶴信吾が担当します）

●この記事・写真等は朝日新聞社の許諾を得て転載しています。（承諾書番号 A16-0783）
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

東京都市大学グループ
学校法人 五島育英会